

近代日本語における無情物主語受身文 —翻訳小説中の訳出例を中心に—

仲村 怜

近代以降の日本語において、西洋諸言語の翻訳の影響を受け、それ以前に見られなかったタイプの無情物を主語に置いた受身文が用いられるようになることが、森岡健二(1999) (『欧文訓読の研究—欧文脈の形成—』明治書院)などで指摘されてきた。本発表では、この近代以降の無情物主語受身文の用法の拡大に注目し、当時の日本語に影響を与えたとされる、逐語訳ベースの翻訳作品の原文(起点テキスト)と訳文(目標テキスト)を対照し、後述する三つの研究課題について分析を行った。研究課題A: 訳出パターンについては、無情物主語受身文は大きく分けて、①構文一致で訳出するパターン、②構文不一致で自動詞化が行われるパターン、③構文不一致で他動詞化が行われるパターンのような三つの訳出パターンによって訳出されていたことが明らかとなった。また、研究課題B: 訳出パターン選択の要因については、構文一致/構文不一致のどちらの訳出においても、主語となる無情物の、有情物との距離が、そのまま受身文とするのか、主語に有情物を補った他動詞文とするのか、または動作性を背景化した自動詞文とするのか、といった訳出の選択に影響していたことが明らかとなった。研究課題C: 訳出パターンの通時的変遷については、明治20年代には一部の有情物に近い名詞を除くほぼ全ての無情物主語受身文が構文不一致で訳出されていたのに対し、明治30年代以降、徐々に構文一致での訳出が訳者の選択肢として用いられるようになること、さらに、構文一致で訳出される動詞には一定の傾向が見られることなどが明らかとなった。